

各界のトップランナーと考える“北海道の未来創造”



第9期北海道総合開発計画が閣議決定された令和6年以降、全国各地で発生した異例の酷暑やコメ不足、歯止めがかからない人口減少、物流・建設業における2024年問題への対応、原材料価格の上昇などによる物価の高騰、トランプ米大統領の高関税政策がもたらす世界経済の不透明な先行きなど、北海道総合開発を取り巻く社会経済情勢は引き続き厳しい状況に置かれている。

一方、現在、脱炭素やデジタル化といった世界の潮流の中、北海道では次世代半導体のパイロットラインが稼働を開始し、日本最大級のAIデータセンターが建設され、また、インバウンド需要が回復するなど、明るい兆しも見られる。

こうした北海道を巡る厳しい社会経済情勢や明るい兆しもある中、2026年が昭和元年から起算して満100年目といった節目の年を迎えるに当たり、北海道が次の100年に向けて力強く、安定した社会を構築し、一層活力ある発展を図るための方策や、北海道の将来展望と夢などについて、産学官の女性トップランナーの方々に語っていただきました。

【出席者】

(五十音順)

朝倉 由紀子 氏

SOC（株）代表取締役社長、北海道経済連合会常任理事

巖倉 啓子 氏

国土交通省北海道開発局稚内開発建設部長

梶井 祥子 氏

北海道開発協会理事、前札幌大谷大学副学長

堀田 悠希 氏

（株）atLOCAL代表取締役、士幌町商工会理事

コーディネーター

町野 和夫 氏

北海道開発協会会長、北海道武蔵女子大学・同大女子短期大学学長

町野 皆さん、お忙しいところお越しいただきありがとうございます。出席者の世代は30代、40代、50代、60代で、職業も農業やIT、行政や教育とバランスがとれた構成となりました。この座談会の企画は以前から進めていましたが、今年はわが国で初めて女性の内閣総理大臣が誕生し、タイムリーな企画となりました。今日は北海道で活躍されている女性のトップランナー



※本座談会は2025年11月4日に開催いたしました。

の方々にお集まりいただき、将来展望や夢などについて語っていただきたいと思います。

最初に自己紹介も兼ねて、北海道の課題や関心があることについてお話しください。

グローバルに視点を向けた経営と人材



朝倉 私の会社は、もともと父が40数年前に創業した会社で、主にお客様から受託を受けてシステムを開発している会社になります。約30年前に札幌市がITの集積地にしたいとテクノパークを計画しました。そ

こに弊社の本社がございます。北海道に本社がある会社ですので、道内企業の生産性を高めるシステムを開発することで活性化に貢献していきたいなと強く思っています。

最近は宇宙事業に関わってみたいと思っています。今、十勝の大樹町でスペースポートを作ろうと頑張っているところに共感し、弊社のITで何か関われないかと、毎月セミナーを開いて勉強しています。

もう一つは、何年か前からマレーシアの社員を採用していて、今年10月に現地法人を設立しました。これまで世界への視点が足りないと思っていました。海外の方と一緒に働くことで、もっとグローバルに視点が広がっていくかなということと、日本の仕事の丁寧さや品質の良さを融合できたらと思い、マレーシアに現地法人を設立しました。

町野 マレーシアで法人化したのはどうしてですか。

朝倉 国のインターンシップ制度で来たマレーシアの留学生が入社したんです。その学生に弊社がマレーシアに進出したらどうなるかというプランをまとめてもらったら、すごく良い出来で実際に行ってみることにしました。3年後にはマレーシアに会社設立予定のため戻ることができるという選択肢を示して募集を行ったのです。するといつかは帰国したいという優秀な方

が集まってくれました。今働いている5名は日本に留学していたので、日本の文化や仕事のやり方を覚えて帰国したので、すごく力になっています。

町野 ありがとうございます。

観光客が来なかった地域も長期的な戦略で地域づくりを

巖倉 私は、東京の世田谷で生まれ2歳のときから千葉で育ちました。両親が東北の出身で、小学校のときは夏に1カ月間は東北の海や山で遊びまわっていました。その自然体験が子ども心にとっても印象深く、大学



は北海道大学を目指してそのまま北海道の仕事に就きたいと就職しました。最初は、札幌の風景を見るだけでもすごく満足したのですが、どんどん東京に近くなっていくように思われて、実は千葉の両親を呼び寄せた5年前に東川町に居を構え、そこを本拠地としています。道内では札幌暮らしが一番長かったのですが、転勤で地方部に住んで地域の暮らしを味わい、東川町で町内会など住民としての付き合いを経験して、やっと北海道人になりつつあるなと思っています。今年4月から稚内市民となり、休日には宗谷管内を回ってキャンプをしたり、利尻島や礼文島にも10回以上渡って登山やトレッキング、サイクリングなど楽しんでいます。

仕事はインフラ整備で観光振興も目的の一つにありますが、北海道では都市と地方の格差のみならず、人の定着や交流に関して地方と地方の格差もすごく大きくなっているなと思います。特に東川町はよくテレビや新聞で取り上げられてますが、緩やかに人口が増えており、ほぼ季節を通じて観光地としても賑わっていますので、地方の成功例の一つのモデルになっていると思います。

一方で、宗谷地方は急激な人口減少が続いており、観光客は夏に集中しているため受け入れ態勢が十分で

はなく、ピーク時はホテル代が高額になったり宿泊難民が出たり、観光客が昼食や夕食時に中心街でも満員で店に入れず、結局コンビニのおにぎりを買って、駅構内や緑地で食べている光景を見たりします。

ただ、実際に住んでみると、東川町でも良いことばかりでなかったり、宗谷地方の住みやすさや独特の地域文化の魅力を実感したりします。

北海道民はあまり札幌よりも北に行こうとしないのですけど、こんなにも多くの日本全国や世界各国の方々がはるばる稚内を目指して来られるということに感動します。また、温暖化がどんどん進んで、札幌や旭川も猛暑に見舞われていますが、稚内は今年一度も30℃にならなかったのです。これからもっと北の価値、夏に涼しく過ごしやすい価値というのはどんどん上がってくると思いますので、それを見越して、今まで観光客が来なかった地域も長期的な戦略で地域づくりを行い、将来のチャンスを活かしていくための準備を着々と進めていくべきではということ、宗谷地方に住んで仕事をしながら思っています。

町野 ありがとうございます。

多文化共生社会の実現が北海道全体の地域活性化に



梶井 梶井でございます。長く大学教員をしておりまして、今は札幌市の社会福祉協議会の会長を務めております。2017年から2024年まで北海道創生協議会の構成員を続けまして、第2期北海道創生総合戦略の検証報告書の作成にも関わりました。その経験から、地域の多様な人材が活躍できる場所をいかにして創造するか、さらに地域外の方を呼び込める仕掛けをどうつくるかが、地域創生のカギになると感じました。

地域社会が目指す姿を「地域共生社会」や「多文化共生社会」という言葉で表現していますが、どちらにも共通するのは地域でのダイバーシティ・マネジメン

ト（多様性の活用）ということだと思います。

特に、女性が社会でどれだけ伸び伸びと力を発揮できているのかというのが、一つの試金石になるのではないかと考えています。

例えば、先ほどの朝倉さんのお話では、日本とマレーシアをつなぐかたちでダイバーシティ・マネジメントを実践されていますね。多文化共生という意味でも、頼もしい事例だと感じました。創生協議会などの会議でも地方の成功事例の報告をお聞きしましたが、やはり多文化共生や地域共生の理念が生きている地域が活性化を達成していると確信しました。これからもそのところが大事なのではないかなと思っています。

専門は社会学ですが、現在、社会福祉協議会の仕事に関わりながら、福祉制度や医療・介護に関心がシフトしています。

先ほど、巖倉さんが東川町にご両親を呼び寄せられたとお話しされましたが、医療や介護の部分は、札幌市への一極集中がちょっと甚だしいところがあるかなと思っています。道が実施した道民意識調査では、地方に住み続ける条件としては、医療・介護の充実を挙げる人が一番多いのです。医療・介護に関わるインフラが札幌に集中し過ぎることは、北海道全体の活性化や、北海道の地方で住みたい人にとってはマイナスの要因にもなっています。そこをオンライン医療などの最新技術を取り入れることで、どこまで克服していくのかもこれからの課題かなと思っています。

町野 ありがとうございます。

これからはローカルなところに共感した旅先選び

堀田 今日は十勝の士幌町から来ました。十勝の中札内村で生まれ育って、両親が営む焼肉屋を5歳のときから手伝っていました。今では商売の英才教育を父から養ってもらったと思っています。幼少期から飲食に携わっていると、食べることは人の健康や幸せに寄与する職業なんだと思うようになり、いつか飲食業を経営したいと思っていました。大学時代に食の根源である農業を勉強したいと十勝の農家を20軒くらい回っ

て、農業の素晴らしさ、農家さんの志を知り、生き生きと働けるような十勝であつたらいいなと地元の中札内村農業協同組合に就職させてもらいました。

その後、夫と出会い家業の農業に従事しています。



すごく農業には興味があつたので嬉しかったのですが、想像以上に農業の世界って男性社会で女性のキャリアがゼロになるんだと思ったのが最初の印象です。農協では接客や販売、経理事務をしていたので、夫の農場でも活かせると思ったのですが、畑仕事やお母さんの仕事を覚えてほしいと言われるし、じゃあ名刺を持って全国各地に営業へ販路拡大しようと思っても反対され悔しい思いをしました。

そこからもっと女性農業者として勉強しようと、十勝の若手女性農業者を集めて勉強会グループを作りました。そんなことをしていたら、当時の士幌町長に道の駅を黒字化する方法の意見を聞きたいと言われました。町の有識者の方たちと、道の駅は「町民たちの憩いの場」だったり、「コミュニティ空間」だったらいよねと、いろいろディスカッションしたのですが、観光客向けの基本計画になってしまいました。観光客のため、観光客に売れる、観光客に支持される道の駅を目指すという意見もわかるのですが、有識者の方たちとの懇話会が破断してしまいました。

そのタイミングで夫と一緒に10年後の観光業はどうなるのだろうと考えました。今は世界から東京や札幌に旅行者が来ていますが、次は地元の食べ物、音楽、着ている服、作っているものなどのローカルなところに共感したくて旅先を選ぶはずなので、私たちの士幌町もそこにヒントがあると思いました。私たち町民の日々の営み、何を大事に、どんな歴史や文化があるかを、もう一度ブラッシュアップし共感してくれる観光客をメインターゲットにしようと、町長にプレゼンしました。そこで町長に道の駅の運営を堀田さん夫婦も

参加してみてはと言われ、3カ月で会社を興し公募に手を挙げて、運営し丸8年経ったところですよ。

今、全道に道の駅が128カ所ありますが、今年道の駅ランキングで「道の駅ピア21しほろ」は何位だったと思いますか？ 昨年は6位でしたが、なんと今年は2位だったのです。8年間の中で過去最高ランクです。

今、道の駅はエンタメ合戦、ハード合戦で、いかにエンタメ性が高くなるためにハードにお金をかけるかです。道の駅の隣に商業施設を誘致したり、千歳のサーモンパークは水族館が後ろにあつたりします。七飯町では男爵ラウンジがあつたり、ホテルや温泉を誘致したりなのです。私の道の駅は素朴で、総工費用も当時7億円くらいで少ないほうです。それでも2位の評価をいただけたというところを、お話しさせていただきました。



町野 ありがとうございます。朝倉さんには国際化。巖倉さんには地方と地方の格差。梶井さんには、ダイバーシティ。共通して少子化というのが大きなキーワードとして取り上げられています。札幌集中や地方間の格差でうまくいっているところと、いっていないところの違いについて聞いてみたいと思うのですが、東川町を本拠地にした理由は何ですか。

「過疎」ではない、「適疎^{*1}」な東川町のまちづくり

巖倉 東京湾岸の埋め立て地という人口的な環境で育ったためもともと地方志向がありましたが、高齢で介護の必要な両親を呼び寄せることになったため、医療や福祉施設の情報から集めていました。東川町に良い施設が見つかり、隣接している旭川市も、人口当たりの医師数や病院数は全国の中核都市の中でも多い方であり安心できました。また旭川空港にも車で15分と近く東京との往来も便利ですが、大雪山系を望む雄大

^{*1} 適疎

過密でも過疎でもなく、適度にまばらでゆとりがある状態。

な景色と、美味しい水や空気、食べ物など良い環境があります。東京からの移住者や二地域居住者も増えています。

町野 東川町自身も移住者を増やす政策はしているのですか。



巖倉 東川町の人口は1950年の約1万1千人をピークとして徐々に減り続け、1993年には7千人を割りましたが、その後は増加に転じ現在は約8千5百人であり、現在はどちらかという

とあまり増えすぎないようにしているのかなと思います。移住したい人は多いのですが、実は土地や空き家、アパートもほとんど空きがないようです。地価も上昇しています。農地法でほとんどの土地に規制がかかっています。東川町の良い戦略だと思うのは、4つある小学校のそれぞれの周囲で数年に一度少しずつ宅地開発しています。そうして子育て世代を呼び小学校を統合しないですむ地域づくりをしています。

東川町は、過疎ではなく、適疎なまちづくりとして、疎であることは維持しながら長期的な戦略を持って住みやすいまちづくりをされていると思います。

梶井 私のゼミにも東川町出身の学生が何人かいました。東川町をテーマに卒論を書いたりしていました。適疎というのは、むやみに人口増を目指さないで、自分たちにとって適切な人口規模に適応していくという政策だと思います。写真甲子園とか、君の椅子とか、全国に発信できるようなアイデアも次々と打ち出していますね。東川町にはアイデアマンがいるんじゃないかと学生に聞いたことがあります。

町立の日本語学校も初めて開校して、多文化共生にもいち早く取り組んでいます。出身の学生は、東川町に戻ったら日本式とベトナム式のお正月の両方を味わえると言っていました。外国人との共生が自然なことで、2つあるコンビニも働いているのは外国籍の青年

だそうです。

町野 日本語学校を開校したというのは、農業とかで必要だからということですか。

巖倉 東川町での日本語研修生受け入れは、町内にある福祉系の専門学校（現名称：東川国際文化福祉専門学校）で2009年から始まり、2015年には公立として国内初である町立日本語学校が開校しています。留学生は、専門学校で介護福祉資格を取得して卒業後に指定の施設で一定期間勤務することを条件に手厚い奨学金が給付される仕組みとなっています。奨学金の原資は東川町が周辺自治体に呼びかけて発足した「外国人介護福祉人材育成支援協議会」の会費から拠出されており、在学中に留学生と協議会の自治体の施設とのマッチングが行われて、地域の福祉を担う貴重な人材として活躍されていると聞きます。

東川町の出生率が高いほうではありませんが、子育て世代も多く移住されています。一方で、宗谷管内は出生率が高いのですが、人口減少が急速に進んでいます。第1次産業が主流で世帯所得が高い地域は一般に出生率が高い傾向がありますが、宗谷管内に大学は一校だけで、地域の高校生は卒業後は多くが進学や就職のため管外へ出ていき、戻ってくる若者は少ない、特に女性は全然戻ってこないとの声を聞いています。

地方で女性の回復率を上げるためには

堀田 今年受講したセミナーで、地方の高校、大学を卒業した方の何%が地元に戻ってくるかという、回復率の話をしていました。男性は40%で、女性に関しては20%～30%です。北海道の地方だと20%を切るそうです。女性は20代～30代に子どもを産む人が多く、その方たちの回復率というのを上げないと出生率につながらないので、各自治体は真剣に女性の回復率を上げなければいけないということでした。なぜ戻らないのかは、職業選択がないというところに行き着くと思うのです。私もそうですが、地方の女性は結局は配偶者の職業によって定住する方がほとんどなのです。私の会社のパートタイム社員は、ほとんどが意図せず札幌

町に来ることになって働いています。そもそも女性が安心して出産できるか、自分のキャリアを地方でも実現できるかという、そもそもの選択肢が低いのです。その中で産休・育休が取れるか、子どもを産んで社会復帰しようと思ったときに、産む前のキャリアを与えてもらえるのかということです。

町野 そういう意味で朝倉さんの会社はいかがですか。

朝倉 弊社は父の社長時代に出産する女性社員に合わせて初めて制度を創設しました。入社してから育児休暇や短時間勤務を早く取り入れたということを知って嬉しく思いました。でも男性の育児休暇には否定的な意見がありました。父の世代は男性が休んでどうするのだという意識があったのです。ですが女性が子育てして男性が手伝うという意識がまず違っていて、一緒に子育てをするという視点に変えた方がいいと社内では話をしています。



今は出産で辞める女性社員はゼロです。みんな普通に続けるという社風になっています。それにプラスして育児休暇を取得する男性社員も年に数名出るようになりました。

堀田 弊社は95%が女性社員なので、まだ男性社員が育児休暇を取ったことがないです。でも取りたい男性社員がいたら嬉しいです。

町野 公務員は制度がしっかりしていますね。

巖倉 制度はあります。女性職員の育児休業取得率はほぼ10割です。男性職員はそこまで至ってはいませんが、近年急速に取得率が伸びていて、令和6年度には1週間以上の取得率は8割を超えています。復帰してバリバリやってくれている女性職員も見かけます。

朝倉 周りの社員のフォローもすごく大事だと思っています。弊社では、家族の介護などの介護休暇が取れる制度もあります。管理職に部下がどのように育児休暇を取っているのか聞いたことがあります。育児休暇

は何か月も前に取るのがわかるので、業務の準備がしやすく会社の負担にはならないということでした。体調不良やけがなどで休む人に比べると計画的に取れるものだから準備もしやすいのだなと思いました。

梶井 道内の地方の女性が、教育や雇用の機会を求めて札幌に集中してくるという流れがあります。ところが、札幌市は未婚率が高い傾向にあって、当然ながら出生率は全国平均よりも低いわけです。皆さんのお話を聞いていて、女性のトップの方が育休の整備など女性が働きやすい環境を積極的に整備されていることがわかり、とても心強く思いました。そのことをもっと発信していただきたいですね。

男性の育児休暇や女性の妊活をオープンにして支援していくのは、地方の事業者では難しいという印象がありました。今も中小規模のところは人手が足りないから、子育てと仕事を両立させる保障が十分にできないという声が聞こえてきますが、実は北海道の場合は、地方の経営者の方々に理解とやる気さえあれば、できるのだと思いました。

町野 それは、女性リーダーというのが大きいですね。

梶井 大きいです。そこは強調したいと思います。女性がリーダーになることで、発想の転換がしやすくなりますから。地方にこそ、子育てと仕事が両立できるシステムや場所があるのだとわかれば、それぞれの地域のために戻ってみようという地方への流れが増えていくと思います。

堀田 それこそ北海道の合計出生率が1人前後で士幌町は1.5人くらい生まれてるのです。士幌町は、農業大国で後継者不足があまり生じていないので、皆さんすごく子どもが生まれるのです。なので裕福で生活にゆとりがあると子どもが生まれるのだなと思うし、そのために安心して産めるための職業と、先ほどの東川町の長期的な総合計画というのは、本当に素晴らしいと思うので、私たち民間と行政が連携して地方を舵取りしていくということが、本当に大事なのだと思います。

IT化で増える女性の職業の選択肢

町野 女性の仕事や農業でもデジタル化で、人手不足や男性しかできなかった仕事ができるようになるというのを聞いたりしますが、どう思いますか。

朝倉 あまりデジタル化が進んでないのかなという印象はあります。でも若い農業者の方が慣れているから取り入れやすいと聞いたことがあります。衛星データを使って無人トラクターを走らせたり、ドローンを使っていると聞きます。

堀田 土幌町の周辺は自動操舵に関しては普及率も95%くらいだと思います。今まで男性しか、畑を一直線に畦^{うね}*2を切っていくことができなかったのです。それが自動になると女性でも運転できるので、女性が大型トラクターに乗って、男性が畑の後ろを歩いたりしているのはよく見かけます。ITは身近だと思うのですが、畑作よりも酪農や肉牛の授精のタイミングという方がITで管理されてるという話を聞きます。

町野 AIということですかね。

堀田 そうですね。

巖倉 建設業も長い間男性が中心でしたが、最近はi-Constructionと言っているIT化が進み、重機も遠隔で動かしている現場もあります。ゲームのようにコントローラーで操作するので、理系文系も男性も女性も関係ないと聞きます。国土交通省ではテックフォース（TEC-FORCE）*3として、災害時に市町村の要請に基づき調査のために職員を派遣するのですが、災害調査では特にドローンが役立つので職員で操作訓練をすると、高校卒業して入局したばかりの事務系の女性が一番上手だった、ということもありました。建設業の世界に先進技術が入ってきたおかげで、女性が入りやすくなってきたと感じます。

建設業はまさに地域が存続するために非常に重要な職業であるということがもっと世の中に理解されると良いと思います。

町野 実際に女性社員は増えてはいないのですか。

巖倉 確実に増えてきていると思います。宗谷管内の建設業で働く女性と稚内開建の女性職員との意見交流

会を行ったのです。民間から十数名来ていただけております。各社、主要な工事を実施してくれているところは女性社員も積極的に募集しているようなので、心強いです。

梶井 もう言い古された言葉ですけど、性別役割分業感みたいなのは、かなりなくなりつつあるのですか。

巖倉 女性も入ってきているとはいえ、やはり建設業で男性が数として圧倒的に多い分野はまだまだあります。宗谷地方で盛んな水産業でも船に乗っての漁をされているという女性の話はまだ耳にしたことはありません。

前の世代が風通しよく汲み取って、変わっていく勇気を



堀田 私はお嫁にきたときにお父さんが電子レンジを使えなくて衝撃を受けました。ジェンダーという言葉はあまり好きではないのですが、性差による役割って何なのだろうと思って夫に話したら、お母さんがお

父さんのご飯を温めることが幸せだと感じたら、それは幸せなことじゃないのかと言われたのです。土幌町は100年前に男性は畑を開墾して、女性は子どもを産んで育ててご飯を作って、その結果豊かな生活を送っています。その歴史もリスペクトし、今の時代はそれだけではいけないと私たち世代が育まなければいけない第2ステージだと感じます。初の女性首相になって、女性社長、女性リーダーという風が吹いてきたタイミングの時代になって嬉しいなと思います。

朝倉 私も両親が昔ながらだったので、父も電子レンジを未だに使えるかわからないですね。今働きながら子育てもしていると家族の協力がないと難しいですね。私は両親も近くにいたので、母の力がかなり助けになっています。私も母に注意されることが多いです。それは本当はあなたがやらなければいけないのよと言われてたり、夫がかなりやってくれています。

* 2 畦

田んぼの周りを囲む土手（畦）の縁をスコップや鍬^{すき}で切り削り、土を新しくする作業。

* 3 テックフォース（TEC-FORCE）

大規模な自然災害が発生した際に、被災自治体を支援するために国土交通省が派遣する緊急災害対策派遣隊。

梶井 第1次産業（水産業とか農業）は役割分業しなければ成り立たなかったという歴史があると思います。都会のサラリーマン的な価値観を押し付けることは不向きな面もありますが、若い層の女性が何を求めているかを、先行世代が注意深く汲み取っていく必要はあります。こだわりを捨てて、変わっていく勇気のようなものを見せたいですね。

ジェンダーギャップ指数が、日本は世界に比べて低いことはよく知られていますが、日本の中でも北海道は最下位です。ジェンダー指数が低い地域というイメージで見られてしまうのは、開拓魂があるはずの北海道としては残念な感じがします。今日のお話では、新しい視点で進んでいることがいろいろあったわけですから、トップランナーの皆さんには変わりつつある北海道の姿をどんどん発信していただけたらと期待します。

つながり志向の若い世代をうまく引き寄せる

町野 最近の大学生は保守化している部分があるという気もするのですが、そういうことは心配ないですか。

梶井 意識調査をすると、今の若い人たちは意外と「つながり志向」が高いという結果が出たりします。確かに、地方から来た学生が地元の仕事があったら戻りたいと言うことが結構あります。なぜかという、人と人がつながりにくい都会にいるよりも、地元のほうが居心地が良い。決して甘えるという意味ではなくて、人間関係を大事しているのではないのかと思います。

町野 SNSは関係はありますか。

梶井 SNSは、ある意味で「つながり志向」の一つのかたちではあると思います。SNSでのつながりがあったとしても、対面的なつながりとなると、やはり地元のほうが実現しやすい。若い層は、必ずしも都会に居たくて居るのではないようにも感じます。若い人のそ



ういう潜在意識をうまく引き寄せることができれば、地方で活躍していく可能性も膨らむと思います。

町野 十勝では、つながり志向の若い人をうまく引き寄せることができますか。

堀田 そうですね。本当につながり志向は、20代30代の私たち子育て世代にはすごく強くなっているので可能性は高いと思います。

北海道の輝かしい未来創造について

町野 最後に、これからの北海道でどういうことをやりたいかやっていくか。あるいは北海道の将来像、近い将来などでも結構ですので、お願いいたします。

堀田 50代、60代の方たちのセカンドキャリアに興味があります。私たちにはない知見もたくさんあるので、東京の外資系のホテルで人事部長をされてきた50代の男性や某地方銀行の常勤をされていた方に、弊社に入社してもらい財務戦略を練るパートナーになってもらいました。本当に男性女性関係なく、これからの未来をどうしていったらいいのかということに関心や価値観のある方と一緒に協同していけるのが理想的だなと思っています。

下は高校生から上は79歳の男性が弊社に所属してるので、上手にバランスを取りながら未来をデザインしていける企業でありたいと思います。そういう働き方、地方がこれからより良くなるために自分の中小企業をどうしていくかという経営者仲間をどんどん増やしていくというところも、2026年は取り組んでいきたいなと思っています。

梶井 今日は30代、40代、50代という年下の世代の方々が、事業を引き継いだり、起業されたり、行政の中でいろいろな生き方を開拓してこられたりと、多彩に活躍されている姿に触れることができました。先行世代としては、これからの北海道を考えると、とても頼もしく感じたところです。

若い世代、特に女性の皆さんには安心して新しいことにチャレンジしてもらいたいと思うのです。その土壌が北海道にあるということを発信していくことが大

事で、失敗しても「大丈夫」と言ってくれる人が周りにたくさんいるのだということを伝えたい。私自身は、「大丈夫」と声をかける立場にあるわけで、若い人たちにエールを送る努力を今年もしたいと思っています。若い人だけではなく、誰もが安心してチャレンジできる、まさに包容力のある北海道であってほしいと願いつつ、私もチャレンジする仲間になりたいと思います。

巖倉 北海道は、本州に比べて近代的な社会資本整備が始まったのが遅く、当時の社会的要請を踏まえて開発事業として道路や農地の整備、河川の災害対策などを進めるために私たちの組織ができたのです。その歴史の流れの中で北海道ならではのいいところを発揮できるようになってきましたが、北海道の本当の価値や役割は、日本そして世界の中でこれからさらに発揮されると思っています。そのためには、いろいろな世代や立場の人が未来の北海道をどうしていくかという議論が非常に重要だと思います。現在第9期が進行中の北海道総合開発計画では、前計画の頃から産業の発展、経済の発展だけではなく、人材育成に焦点が当たってきています。そして今回の計画でもその比重は大きくなり、さらにさまざまな関係者による「共創」が施策を進めるキーワードとなっています。

そういう中では、私としては女性の活躍とか女性を強調するような政策は、そろそろ表現は工夫したらいかなとは思っています。それぞれの人が自分の生き方をどうやって実現していけるか、その舞台となっていける北海道づくりという議論を進めていくことを改めて考えていかなければと思います。

朝倉 日本の技術は誇れるものだと思うので、世界に発信していけたら良いと思っています。マレーシアに現地法人を作りましたので、現地社員を50名ぐらいに増やしたいと思っています。そのマレーシア社員を通して宗教のこともすごく勉強になりました。また、何か偏見を持っていたような文化や違いを話してみると、よく理解することができました。私たち企業も受け入れ態勢をしっかりとってお互いのことを理解しなくてははいけません。

それから、企業として子どもたちがワクワクするような未来を作ることをしていきたいと思うので、宇宙事業や新しいことにチャレンジして、失敗も恐れずにやっていける新しい年にしたいと思います。

町野 ありがとうございます。皆さんから多くの貴重な意見、示唆に富んだお話をいただき、非常に充実し、かつ楽しく盛り上がった座談会になりました。

今後も北海道の輝かしい未来創造のために、ご尽力いただければと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。

朝倉 由紀子 (あさくら ゆきこ)

1982年札幌市生まれ。小樽商科大学商学部企業法学科を卒業。株式会社北洋銀行に入学。支店業務を経て市場開発部で地方債や私募債発行業務に携わり多忙な日々を過ごすも父の朝倉幹雄会長の打診を受け、2010年にSOC株式会社に入社。経理財務、人事、経営企画などの業務に従事し、2015年に代表取締役社長に就任。また、業務の傍ら、小樽商科大学大学院商学研究科に通い経営管理修士(MBA)を取得した。現在のシステム開発に加え、AI事業や宇宙事業、マレーシアでの現地法人設立などに力を入れ、IT技術によってより豊かな社会になることを目指す。2児の母でもあり、子育て世代が働きやすい職場づくりにも力を入れている。

巖倉 啓子 (いわくら けいこ)

1967年東京都世田谷区生まれ。北海道大学農学部林学科卒業。1991年北海道開発庁(当時)入庁。石狩川水系の治水対策などを担当し、2006年国土交通省砂防部砂防計画課課長補佐として全国の土砂災害対策の推進に携わる。その後北海道開発局室蘭開発建設部苫小牧河川事務所長、北海道局参事官室付開発専門官、札幌開発建設部札幌河川事務所長、旭川開発建設部次長、東北地方整備局青森河川国道事務所長、寒地土木研究所水環境保全グループ上席研究員、北海道開発局事業振興部都市住宅課長、建設部河川工事課長を経て、2025年4月より現職。

梶井 祥子 (かじい しょうこ)

1956年札幌市生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。1980年北海道新聞社入社。1989年北星学園女子短期大学非常勤講師。2003年北海道武蔵女子短期大学准教授、2009年同大学教授、2012年札幌大谷大学社会学部地域社会学科教授、2021年同大学副学長。2024年札幌市社会福祉協議会会長。北海道開発協会理事。専攻は、社会学、家族社会学、ジェンダー論、ソーシャル・キャピタル論。

堀田 悠希 (ほった ゆき)

1987年中札内村生まれ。2008年、北海道武蔵女子短期大学卒業後に中札内村農業協同組合にて勤務。2012年、土幌町の農業後継者との結婚を期に夢想農園へ就農。農家へ嫁いでも今までのキャリアを農業に活かしたいと思い、自ら百貨店・飲食店・卸しへの営業活動を行い、多様なニーズ対応する直販事業をスタート。2016年に地域資源を活用した商品開発などを行う「atLOCAL」を設立。2017年から、リニューアルオープンした道の駅「ピア21しほろ」の運営・管理を担う。2020年から土幌町商工会初の女性理事を務める。

町野 和夫 (まちの かずお)

1957年鹿児島市生まれ。1980年京都大学経済学部卒業。三菱総合研究所を経て、米国ノースキャロライナ大学チャペルヒル校でPhD(経済学)。1995年北海道大学経済学部助教授。2004年同大学教授、同大学経済学研究科長、経済学部長。公共政策大学院教授などをを経て2020年北海道大学名誉教授。同年北海道武蔵女子短期大学学長、2022年北海道開発協会会長。2024年北海道武蔵女子大学・女子短期大学学長。